2024年2月25日(日)
中国新聞SELECT掲載

JICAだより

チュニジア㊦
(2022年から派遣)
増田道子さん(44)
スファックス市在住

平和展で原爆を伝える

JICA海外協力隊員として、チュニジアで青少年の健全な育成に取り組む活動も1年半になった。この国で暮らしているとよく耳にする言葉が「サレーム」。チュニジア方言のアラビア語で「平和」という意味だが、「こんにちは」に近い日常的なあいさつとして使われる。平和を願う私にとっては心温まり、思わず笑みがあふれる言葉だ。

2011年の「ジャスミン革命」は記憶に新しいが、チュニジアは古代カルタゴの時代から国を揺るがす出来事も少なくなく、ひときわ平和への関心が高い。私が広島出身と伝えると驚きの表情を見せ、「あなたの街の悲しい出来事を知っている」と声をかけられることも多い。

同じイスラム教を国教とするアラブ諸国などとの連帯が強いこの国の青少年たちは、昨今のパレスチナ情勢には特に心を痛めている。イスラエル軍のガザ地区侵攻への抗議活動は全土で続いている。

私は、中東・アフリカ地域で活動する同期隊員10人と平和な社会の実現を目指して作ったグループの活動として、日本語と文化を教えているスファックス市の青少年と昨年11月、平和展を開いた。被爆直後の広島・長崎市を写した写真パネルや、被爆後、白血病からの回復を願って鶴を折り続けた佐々木禎子さんを紹介するフランス語版ポスターなどを広島の原爆資料館から借り受けた。

想像よりはるかに悲惨な写真に涙する人、復興を遂げた広島を知り希望を感じたと言う人など来場者の受け止めはさまざまだった。

幼い頃から被爆当時の話を聞いてきた私は、平和を願うことは当たり前に思っていた。しかし同じ過ちを繰り返さないためにも思うだけではなく、広島の歴史と願いを伝えなければとの思いを今回、強くした。

「平和展」で日本語・文化を教えている青少年や来場者と。右から3人目が筆者